



『赤い高粱』

昨日の英語劇は、予定終了時間よりも1時間以上長い上演で、ある意味得をしたのかも知れないし、シェークスピアの作品には、さりげなくユーモアや風刺などが組み込まれていたりするので、(悲劇とはいっても)ちゃんと英語が分かる人には、ニヤッとするセリフがあったのかも知れないが、リスニングに自信がない私には、2時間半の英語漬けは正直ちょっと疲れた。(ちなみに、当初は17時終演予定だから、ショートバージョンかなにかをやる予定だったのが、全編上演ということにでもなったのだろうか…?) それでも、例えば"neither"などの発音がイギリス式だったりしてそれなりに楽しめたし、君たちにとっては、英語ばかりでなく、演技や舞台装置、舞台袖での生演奏など、来年の星陵祭に向けてヒントとなることもいっぱいあったに違いない。

*

シェークスピアといえば英国の文豪だが、先日、村上春樹が受賞するかと思っていたノーベル文学賞を中国の作家が受賞した。莫言氏である。恥ずかしながら、私は中国文学は(多分)一人の作家しか読んでことがない。君たちはどうですか?…って、多分、私が読んだことのある作家を、中学3年生の時に勉強したはずなのである。思い出した?

そう、魯迅である。中学3年生の教科書には「故郷」が掲載されている。ルントーとか、チャーとか、コンパスとか、思い出すのではないだろうか。この作品には竹内好の名訳が

あって、最後の

思うに希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

という一節は、忘れられない感動である。

その魯迅の作品集(薄い文庫本一冊)を読んだことがあるだけだったのだが、今回、この受賞があったので、岩波現代文庫から出ている『赤い高粱』という作品を買って読んでみることにした。

この作品、北京オリンピックの開会式などで演出を手がけた中国人映画監督のチャン・イーモウが、コン・リー主演で撮影した最初の映画作品「紅いコーリャン」の原作でもあることから、莫言作品の中ではもっとも読みやすいのではないかと想像して買ってみたのだが、いや、なかなかいい作品である…というか、ノーベル文学賞を受賞するだけのことはあると思った。「中国山東省高密県東北郷。日本軍が蛮勇を振るうこの地を舞台に、血と土、酒に彩られた一族の凄烈な物語が始まる」と紹介されるこの作品、残酷な現実と美しくも悲しい幻想的なイメージが交錯して独特の世界を創り上げており、読み応えがある。

同時に、井口晃さんという方が訳しているのだが、この方の訳も素晴らしいのではないかと想像される。読みやすいし、それでいて場面の雰囲気や充分に伝えるリアリティがある。読書の秋に推薦したい。